

「隠退に寄せて」

2014年4月3日

47年の牧師生活は、一応終わりました。若い時、聖書の信仰と文化に魅せられ、その道をひたすら歩んできました。色々なことを思い出しますが、アッという間であったと、思っています。私の部屋の窓からは、桜が満開に咲き誇っています。ベランダから、首を西に向けると、晴れた日には、雪をかぶった富士山が見えます。太宰治は「富士には月見草がよく似合う」と書いていますが、春霞が薄くかかる富士と桜も、結構楽しませてくれます。ホッとしている時を味わっています。多くの人に支えられてきた幸いを深く受け止めています。

私にとって福音とは、自分自身を受け入れられなくとも、周りからお前は無能だと評されようとも、神は、イエス・キリストの言葉と業において、私を「よしと是認」してくだっていることです。聖書は、これを「罪の贖い、罪の赦し、神との和解」などという言葉で語っています。神が共にいてくださる(インマヌエル)ということです。どんなに自分を否定し、どんなに他者から否定されようとも、神は、私の生を絶対的に是認して、共にいてくださいます。宗教的幻想という人もいるで

しょうが、「これでいいのだ」という言葉を聞きたかったのです。この「大いなる然り」をイエス・キリストに聴いて、生きる意味と喜びを見出し、生きてきました。召される日までの、私の信仰です。

そして、この喜びは、全ての人も同じ「大いなる然り」の元に置かれているのだから、出会う人、遠くにいて出会えない人とも、共にありたいという願いを示されてきました。教会という場で、多くの人と出会い、未知の人々の生活を知らされてきました。そこでは、生きることの悲しみ、人間が作る社会、歴史の罪深さを、自らの問題として考えさせられました。しかし、どんなに悲しく、罪深くとも、イエス・キリストは、それらを「なお、よし」としてくださっている。この信仰は、倒れることを認めず、立てる者として、生かしてくださいました。

直接的に教会に仕える牧師ではないですが、召される日まで、牧師職にあることは確かでしょう。残された日々を、窓辺から見える空を仰ぎながら、生かされてきた愛と平和を証する歩みをしたいと願っています。ホームページを開きます。お目に止まったら、お読みください。